

原発事故に危機を感じて飛び出しあちこち まで逃げた方たちこそが平和の希望です。

篠山市の原発防災市民委員として、ヨウ素剤の

事前配布を決め実施したフリーライター

守田敏也 さん



「お山のうえでどんじやらホイ」でトークをする守田さん (2016.9.4)

311以来、内部被ばくなど原発・放射能の問題を精力的に発信し続けてきた守田さんの文章はよく見聞きしていた。そして脱原発の集会や山人などでも会うことがあり、そのうちインタビューさせてほしいと前々から思っていた。
先月(9月)に大鹿村の山の中で開かれたお祭り・ドンジャラで彼のトークを聞き、わかりやすい話しに感心したので、そのあと京都でインタビューさせてもらった。防災、原発、憲法、平和、戦争、ジエンダーなど幅広い内容がつながりあい、かみくだかれた話される言葉がよく伝わってきた。中でも自分の中に隠れている矛盾に気付き改めていく態度が大事だと思った。(あ)

ドンジャラでのトークより

昨日の午前中は兵庫県の篠山市にいました。篠山市の原子力災害検討委員会の委員をしていて会議があったからです。篠山市では今年1月31日から、安定ヨウ素剤の事前配布をはじめました。原発から30KMより外の自治体では全国ではじめてのことです。市内200の自治会で原子力災害にどう備えるかの学習会を行っていて、市民の皆さんがこうした問題意識に応じて下さっています。その講演会を終えてからこちらにやってきました。

今日、冒頭で話したいのは、自然災害の話です。原子力災害を考える時にも、まずは一般の災害に対してどういうふうに考えるのがとても大事です。

ご存じのように、4月に熊本は甚大な地震に襲われました。震度7の激震が2度起こりました。観測史上初めてのことでした。このため日本中の災害対策大変なことになっています。なぜかという日本の家屋の耐震水準は震度7の地震に耐えることで、震度7に2回耐えるとはなっていないのです。他にも観測史上初めてのことがたくさん起きています。

スイスにスイスリーという保険会社があります。保険会社は世界の気候変動に一番敏感です。災害に対して保険金を払わないとい

けないから、災害の発生可能性を常にシビアに予想しています。そのスイスリーが世界の660都市を、主に水害を基準に比較して危険度ランキングをつくりました。そうしたらワースト1は東京・横浜でした。さらにワースト4は大阪・神戸です。ワースト6は名古屋です。なんとワースト10の中に日本の主要都市圏が3つも入っているのです。しかもスイスリーは全世界の人に対して、「このワースト10に入っている都市に移住してはならない」と警告しています。

だから東京都の元職員の方が言っているのですけれど、「日本を攻撃するのに核兵器も軍隊もいらない。大潮の満潮時に無人機を飛ばして利根川の堤防を破壊すれば首都機能は完全に喪失する」のです。ほんとうにそんな状態ですから、日本はとてもではないけれど戦争の出来る国ではありません。

憲法のことかというと、僕は憲法9条は理想としても素晴らしい条文だと思いますけれども、あれは理想どころか軍事的リアリティだと思います。

さらに、僕は原発のこととずっと格闘していますけれども、どう考えても日本政府は北朝鮮を心から信頼しているから、福井県にあれば原発を建てたとか考えられないのですよね。また中国のことをとても信頼しているから、中国に一番近い川内原発から動か

し始めたとか考えられない。実際はそういうリアリティなんか何にも考えていないのですよ。

もともと「日本列島は軍事的に守り切れない」というのは、戦前からの常識です。海岸線が長すぎるのです。防衛線が長すぎる。だから戦前の旧日本帝国主義は植民地をたくさん奪って、そこに防衛線をつくらうとしたのです。「満蒙が日本の生命線」だとか、太平洋の島々の防衛ラインを突破されたらもうだめだというのは、実は戦前の軍部の常識でもあったのです。

しかも戦後、日本はその海岸線に危ないものをいっぱいつくっちゃったんです。原発だけでなく、石油コンビナートもそうですし、あるいは走っている新幹線をひっくり返すだけで甚大な被害が出ます。つまり、世界の人びとが攻撃してこないことを前提にした国づくりをやってきたのです。

この国は憲法9条を軍事的リアリティとして守って、さらに災害に備えていかないと、もう守れません。ところが、日本の地震学者は何人いるか知っていますか？わずか40人しかいないのです。「崩壊学級」と言われているのです。ぜんぜん予算が行ってないのです。イタリアの地震で300人の方が亡くなりましたね。そのイタリアでは地震学者が600人います。つまり日本は、本当の意味での国防を全くないがしろにした国なのです。

だからそこを転換していかないと、私達のいのちが守れない。そういう状態にあることを知って下さい。

東京、大阪、名古屋がなんでそんなに弱いのかの根拠を言います。これは明治以降の日本の国作りの問題です。さきほど、鹿児島では年間平均降水量が2200mmだと言いました。それに対してプラハは500mmぐらいです。だいたいヨーロッパは500から800mmぐらいのオーダーです。つまり日本はヨーロッパより4倍の雨が降る国なのです。

日本の森林率は何%か知っていますか？国土の67%で世界でダントツのレベルです。その根拠は水(雨)が多く降るからなのです。雨は私達の最大の恵みの神です。しかし一気に降ると、洪水をおこします。だからこの国は常に水の害、川の氾濫とどう向き合うのかということが、生活上、社会上、一番重要なことだったのです。じゃあそういう知識を誰が持っていたのかというと、戦国武将はほとんどそうでした。戦国武将にとっては治水や利水は軍事的テクノロジーでもありました。城攻めなどにも使われましたね。

どうやって河川を管理したのかというと、日本の川というのは暴れ川で、洪水を止めることは難しいのです。ではどうするのかというと、洪水を散らす方法を考えたのです。武田信玄なんかは「信玄堤」と呼ばれる小規模な堤防をたくさんつくって、洪水をちよつとずつおこして、水をあちこちに分散して、一箇所に急激なものが来ないようにするという管理をしたのです。

この夏に起こった北海道の水害では、南富良野の空知川が決壊し、大きな被害が出ました。川は堤防が決壊するのが一番怖いのです。じゃあどうすればいいのかというと、江戸時代はあらかじめある一箇所だけ低くしておいて、そこから越水とって、洪水を堤防の上をわざと越えさせてしまうのです。そうすると堤防は壊れないので、水が流れていきはするのですが、大被害にはならない。では入ってきた水はどうするのかというと、そこに防水林をつくっています。するとまず水流が弱まるのです。洪水の時に怖いのは、水の勢いと、あとは泥なのです。泥が生活圏に入り込んでしまうと、復旧はきわめて難しい。だから防水林を置いておくと、そこに砂が落ちて、漉した水がくるのです。

ところがですね、明治時代になって、日本は西洋のテクノロジーを余りにも無批判的に信じてしまって直輸入してしまったのです。しかしヨーロッパは年間500mmそこそこしか雨が降らないので、川の流れは穏やかなのです。たとえばライン川とかドナウ川とか、すごく平坦なところを流れているので、ゆったりしています。洪水も少ない。そこで



作られた堤防技術を明治政府は取り入れてしまったのです。

オランダのデーレケという河川専門家が日本に来ました。そして日本の川を見た時に、彼は有名な言葉を残すのです。「これは川ではない。滝だ」と。ヨーロッパでは日本の川のようなものを滝と言うのだと。だから彼は「オランダの技術をそのまま適用してはいけない」と明治政府に言うのですね。

ところが明治政府は、とにかく西洋のものは何でもいいのだと取り入れていったので、それまでの洪水を散らす方法をやめて、堤防をかさ上げして、洪水を押さえ込む方式に転換したのです。その結果、どうなったのか。かなり水をたたえた状態で堤防が決壊したのです。それに対してどうしたのか。堤防をかさ上げたのです。じゃあどうなるのか。その次の大洪水が起こったのです。それできちゃったんです。ずっとこの150年間。

今、利根川とか淀川は、有史以来、最大の水量をたたえているのです。だから危険なのです。政府の統計でも、埼玉県行田市あたりが一番切れやすいとなっているのですけれど、切れたら瞬く間に5000人の死者が出るとされています。

ちなみに江戸時代の智慧は素晴しくて、洪水があって水が流れると、どうしたって誰かの田畑が被害を受けるわけです。それに対してどうするのか、地域の庄屋さんのところに人が集まって討論して被害補償を考えるのですけれど、もの見事に一致するシステムがあったのです。

日本では伝統的に多数決はとりません。あくまでも全員合意をめざします。それで合意できるのです。一番過酷なシステムは、合意に達するまで寝てはいけないというものです。そうすると、一日目くらいはみんなで利害をわーわー言い合うのですけれど、二日目になるとだんだん疲れてきて、三日目くらいになるととにかく全員が一致できる点を探り出す。そして最後に全員一致で結論が出せるので、もう完璧に守られたそうです。

このことを研究している方の言葉が胸に残っているのですけれど、「おそらく日本人は江戸時代の方が対話がうまかっただろう」

と。ところが今の河川の管轄は国土交通省です。一級河川であれば県知事でさえ何も言えないのです。住民は川の管理から排除されているのです。だから住民は官僚に対して願うか文句を言うかの2つしか選択肢がないのです。ぜんぜん討論に参加していない。これを変えなければいけないです。

川の管理のシステムを全部変えるのにはなかなか時間がかかりますけれども、災害対策について、自分の住んでいる地域で積極的に参画してください。それで

下から災害に対する知識を得ていざという時にどうしたいか判断できるようになっていかないと、とても命を守れません。ごく少数の官僚が「逃げる」ということを的確にピンポイントで言うことはもはやできない時代なのです。それぞれの地域の、川を知っている方が自主的な判断をして、早め早めの避難をしないと、安全は守れません。

そのことを進めるための大きな柱の一つとして、僕は原子力災害対策に取り組んでいます。篠山市でヨウ素剤を配布したことを話しましたが、これはもちろん放射性ヨウ素が飛んできた時に甲状腺に入ってしまうので、それを予防するための薬です。だけどこれを事前配布するのは、原子力災害が起こりうる、その時に一人一人がどうやって逃げ出すのかを考えておくことを意識付けするためにも行っているのです。そのために篠山では討論会を繰り返し繰り返し行ってきました。ヨウ素剤の配布はそこに意味があることを知って下さい。だから逆に政府はヨウ素剤を配りたくないのです。配ると原発の危険性に多くの人が目覚めてしまうからです。

もう一つ僕が主張しているのは、自衛隊を災害救助隊に変えることです。熊本地震の時でも自衛隊って迷彩服を着ていますよね。あれは敵に見えないために着ているのですが、それで災害救助をするのはばかばかしいのです。逆に消防隊はオレンジの服ですが、あれは要救助者にすぐに見えるための色なのです。迷彩服で災害救助をやっているばかばかしいと思っているのは自衛官だと思います。人を殺す論理と人を救う論理は真逆なのです。だからその部隊を完全に戦争から切り離して、救助の専門部隊に変えてしまって、そういう意味で「サンダーバードにせよ」と僕は言っているのです。国防のリアリティからも必要です。これは理想ではなくリアリズムです。

さらにそういう部隊をこそ世界中に派遣すればいいと思うのです。そうすれば災害対策で派遣する専門部隊を持った世界で最初の国に日本はなります。日本の歴史を振り返ると、侵略とか、恥ずかしい、謝らなければ

いけないことばかりで、なかなか誇れることがないので、世界が災害に瀕しているわけですから、それを助ける部隊を作った国として歴史に残ればいいなと思っています。アメリカが世界の警察官になろうとしてるのだったら、日本は世界の消防官になろうと。

それが日本が生き残るリアリティであり、同時に私達がこの国をもっと誇れるものにしていく道だと思えます。だから、「理想的でいいですね」ってよく言われるのですが、これは理想ではなく、リアリティです。

激甚災害が世界中を襲っています。「観測史上初の事態」は日本だけで起こっているわけではありません。世界中でこのことでたくさんの方が亡くなっているのです。だからこのことに取り組むことはリアリティがあるということを押さえて、一緒に声を上げて頂きたいと思えます。

戦争の問題では、ご存じのように沖縄で島袋里奈さんが元海兵隊員にレイプされて殺されるというとても痛ましい事件が起きました。彼女が尊厳を持って生きたことを私達が胸にとどめることが必要だと思います。こういうとき、アメリカ軍は必ず「綱紀を粛正する」と言います。だけどこれは絶対にできないのです。

なぜできないかという、海兵隊という組織の持っている恐ろしさのためです。海兵隊というのは防衛部隊ではないのです。沖縄にいても日本を守る部隊ではありません。何の部隊かという敵前上陸部隊です。敵地に行って上陸して直接に人を殺すので、一番素手で人を殺す確率が高い部隊です。海兵隊はいざとなればナイフで相手の首元を掻き切って殺します。そのために壮絶な訓練を行っているのです。

アメリカの平均的な若者は、とてもではないけれど人殺しなんかできません。そんな若者を人殺しをするメンタリティーをもった兵士に変える訓練をします。その訓練の肝は何かというと、罵倒し続けることなのです。上官が新兵の前に言ってもものすごく罵倒し、それに対して“yes sir, yes sir”と言わされるのです。その罵倒の内容には性的スラングがすごく使われるのです。性的なことを言われるとすごく侮辱感が強くて、心を潰されるからなのです。

とくにアメリカ軍は2011年まで同性愛を認めていませんでした。したがって同性愛者に対してきわめて差別的な組織です。だから教官はすぐに、..ちょっとイヤな言葉を使いますが、「おまえは何人にフェラしてきたんだ？」とかいうようなことを言うのです。「おまえはほんとうはやってるだろう？」「no sir」「ウソ言え、やってるだろう？」とずーっ



と繰り返すのです。

あるいは走りながらみんなで歌をうたうのです。「ミリタリー・ケイデンス」と言うのですが、これの歌詞がめちゃくちゃです。僕が見た一番ひどいのが、ベトナム戦争の時のもので、“I wanna Rape Kill Pillage’n’ Burn,annnn’ Eat dead Baaa-bies”(俺はレイプしてやる、殺してやる、略奪してやる、赤ん坊を焼いて食ってやる)これを歌わせているのですよ。レイプしろって言っているのです、アメリカ軍は。そういう心情にたたないと、若者は人を殺せないのです。だから心の中がぐちゃぐちゃになります。トラウマになってしまうのです。

その結果、アメリカ軍の若者は人殺しができるようになるのです。戦場に行って残虐な人殺しをして来るわけです。その末に帰ってきてどうして普通の人間に戻れますか？彼らは命令された人格のままに動いているだけなのです。その結果、レイプするのです。だから綱紀粛正するならば、この訓練をやめさせなければならないのです。

また私達が深く考えなければならないのは、自衛隊がアメリカ軍と今後一緒に行動するならば、自衛隊も同じ訓練をしなければ人を殺せないということです。自衛隊は今そこまでのメンタリティーは持っていません。だから戦場ではめげめげに負けるでしょう。

そのことをおそらく政府は考えていて、国葬の準備なんかもイラク戦争の時からやっているそうです。

この国は自国の兵士がまだ一人も外国人を殺していません。だから平和なのです。

私はいま京都に住んでいますけれど、世界中から観光客が押し寄せてきています。もうちょっとどうにかしてくれというくらい。何故だと思いますか？日本が一番安全だからです。もうヨーロッパとかとても怖くて行けません。

だから私達はほんとうに大事な平和をいま手中にしています。それを安倍政権がまったく愚かにも壊そうとしていることに対して、平和こそが私達にとってある意味最大の資源であり、世界に対してアピールしていく

ものだということをよく考えて、レイプすることを命令されるような野蛮な海兵隊と自衛隊と一緒に訓練することをやめさせるよう力を注ぎましょう。

同時にアメリカの若者も早く戦争から解放したいです。そんな、若者を人格崩壊に追いやっているアメリカ軍、政府のあり方こそが批判されるべきであって、多くのアメリカの若者も犠牲者です。貧しい人ほど戦場に連れて行かれています。それを変えること、そのための努力を訴えたいと思います。

原発の問題については言いたいことが山積みです。

最近、再稼働した伊方原発のポンプ故障からも見えてくるように、原発には欠陥部品がいっぱいあるのです。だから、原発の恐ろしい構造、避難計画がめちゃくちゃなこと等いろいろ話したいことはあるのですが、一番怖いのは放射能の被害がものすごく軽く捉えられていることです。これが決定的です。大きなポイントは、現在の放射線学がつくられたのは、広島・長崎の被ばく者調査からだということです。誰が行ったのかというと、原爆を落としたアメリカ軍です。加害者が被害者を調査したのです。こんな調査はあってはならないのです。その時にアメリカ軍が被ばくの影響を非常に低く見積もった内で放射線防護学がつくられているから、いまま放射線に対する評価はものすごく甘いのです。

実際はどうなのかというと、各地で健康被害が繰り返し起こっています。現在の関東・東北、福島だけではないですよ、各地でどんどん起こっているのが実情です。しかし大元にある核戦略の下で放射能の影響が小さく見積もられてきているので、一つ一つの病気が放射能のせいだとカウントされません。だから決して過小評価しないで、慎重に食べるものを選んで、日々の生活の中で放射能から身を守って下さい。

僕は福島原発事故の直後から東北や関東の方に「逃げなくてはダメだ」と発信しました。その情報をメーリングリストに載せたり、各地に転送してくださった方がいて、すぐに福島や東北、関東から沖縄や西日本に逃げてくれた方たちがいました。その方たち自身も友だちに情報を投げてくれたそうです。そうやって原発事故に対して最初に危機を感じて飛び出してあちこちまで逃げた方たちこそがこの国のこれからの平和の希望です。それはすべての政党、すべての進歩的団体を飛び越えました。どこの団体も「避難した方がいい」と勧告してはくれませんでした。少なくとも主要政党は現在も「避難せよ」とは言っていません。だから避難した方たちの行為はすべての政党を飛び越えた。飛び越

えられたまま政党は追いついてこれていないので、この結果が選挙にはまだ反映されていません。しかしこれは日本政府や企業が繰り返し作ってきたウソの体系を崩すことですごいパワーになっています。

あれだけ圧倒的多数の議席がある安倍政権が原発の再稼働をなかなか強行できない。デモが怖いからです。首相官邸前のデモ、そして全国の電力会社前のデモがもう200回を超えつつあります。このデモは誰が作ってくれたのかと言ったら、原発事故で被災して全国に散った人たちです。また福島や東日本から声を上げた方たちです。

その声を全国でいろんな方が受け止めて、お話を持ってきて、原発事故があったらどんなに悲惨なことなのかを受け止めました。また多くの被災者の方があなたの街を守って下さいと涙ながらに訴えて下さいました。それに心を動かされた方たちが、とりあえず自分たちの地域の電力会社に行こうとデモをしてきたから、政権党は原発を動かして来られなかったのです。この国のウソ、欺しを最先頭でひっくり返している方がこの国の平和を作りつつあります。僕はそれが平和の可能性だと思っています。

京都のお店「ホテヴィラ」で待ち合わせてインタビューした



ドンジャラから帰って少しして、すべての食材の放射線を調べて安全なものだけ提供している京都のレストラン、ノンベクキッチン ホテヴィラで守田さんにインタビューさせてもらった。この店には名前のない新聞を置いてもらっており、また守田さんはこの店の常連でいろいろアドバイスをしているようだが、残念ながらホテヴィラは11月いっぱいまで閉店してしまうそうだ。

さて、子どものころはどちらかという愛国少年だったという守田さん。しかし高校のころ、沖縄戦のフィルムを見て、特攻がまったくの無駄だったのを知った時はショックだったという。

—— 守田さん自身の今につながるプロフィールを聞かせてください。

守田● 小6から4年間、東京から引っ越して大阪の豊中の学校に通ったのですが、それがすばらしくよかった。あとから聞いたら、丁度その頃が豊中教組の黄金期だったという。しかもその豊中の中でも一番いい教員を集めてると言われていた中学校に僕は行って同窓会の際に元教師から聞きました。ほかの学校からはずるいと言われていたと。僕なんかは反抗する子でしたけど、それに先生がとことん向き合ってくれる。活発だったので体育委員とかやっていたのですが、体育の授業のやり方とかが気に入らないとみんなで教室に引き上げちゃったりして。それで放課後に呼び出されて、「なぜそういうことをやったのか言え」って言われて、それはまともに論争してくれるのです。最後は大人の智慧で丸め込まれて終わったと思うのですが、だからといって処分されたり罰せられることもなくて、「次からは授業が終わってから抗議しろ」と約束させられるみたいな(笑)。「ボイコットはするな」みたいな。

だから世の中というのは、まっとうな意見を言えば聞いてくれるものだという、非常に大きな誤解してしまった(笑)、いい意味です。それで二十歳くらいになってから、どうもそうじゃないってことに気がついたけれど、そのころにはもう自分の言いたいことははっきり主張していくことが普通だという感覚がすっかり身に着いていたのです。

—— いろんな面で今の学校と違いますね。

守田● 戦後の民主主義教育だとか平和教育の一番いいものに触れることが出来たと思います。それで最近になって、「ああ、僕の中に宿っている不正に抗議する力は自分の意志力のようであって、そうではないのだ」と思うようになりました。僕が強いからそういう主張ができるというより、育まれてきた力というのか、大切に育てていただいたものだということをとみに感じています。

それが子どものころのことで、僕は高校生から社会運動に飛び込みました。大学は中央大学に行ったのですが、それはもともとそこに仲間の人たちがいたからであって、学部なんかどうでもよくて、受けたら商学部にひっかかったので入学しました。でも授業にはまったく出ませんでした。学生運動に明け暮れていたのです。僕はそれで「大学の専攻は？」と聞かれたら「雑学」と答えています。

—— いまの肩書きはフリーライター？

守田● はい、フリーライターです。僕はずっと社会運動をやってきたので、自分自身一番自然にはアクティビストだと思っています。でもたとえばヨーロッパなどではアクティビストで通用するのだけれど、日本の中

矢ヶ崎克馬さんとの共著の岩波ブックレット



守田さんの本。海象社刊

ではほぼ死語なのです。よくフリーライターだというとジャーナリストと書き換えられるのですが、ジャーナリズムを自分の一番の本義とはしてやってきたわけではないので、僕の中ではジャーナリストではなくフリーライターだと分けています。格下なんですよ。(笑)

—— いま関心があって実際に関わっているテーマは、原発、憲法、戦争、平和、防災とかですか？

守田● あとやっぱり環境、それにジェンダーですね。

—— 軍隊「慰安婦」の問題をよく書いておられますよね。

守田● 軍隊「慰安婦」の問題だけではなくて、たとえば男性と女性でお店に入ったら、ご飯のおひつをテーブルに持ってきて、そこから食べることがあるのですが、店の人がおひつを女性の方に置くわけですよ。それで僕はそれを真ん中に持ってきて、「僕がやるよ」と。

たとえばそういうことが、市民運動や、選挙運動などの場でも起こっていることがある。男性が女性に給仕されているばかりで、誰も不思議に思わない。男性自身がそうやって育てられてくるからですよ。男の子にはお母さんがやってくれるのが当たり前で、女の子だったら家事をして当たり前みたいな。

そのような日本では女性の社会的地位がすごく低くて、国会議員の数とか社長の数と

インタビューの後、友だちもささって4人でホテヴィラのおいしい食事を楽しみました。左は1年前にここでインタビューした川口さん、右は前号表紙絵の小春ちゃん。

か、世界の100番以下なのです。中国を馬鹿にしたがる人が多いけれども、その中国は30番くらいですね。中国の女性の方が日本の女性より圧倒的に地位が高いわけです。リスペクトされてるわけです。ということは、僕ら日本の男性は世界的平均からきわめて劣った愚かな存在だというわけです。

そういうことを変えていくのは、大きな社会変革だと思います。

—— 政治の世界で特にそういう傾向がありますよね。



守田● 男性議員ばかりですし、女性の多い共産党でも女性の党首を選んだことがないとかね。ちょっと偉そうかもしれませんが、「君たち男性主義じゃだめなんじゃないの?」と言いたいのです。ドンジャラに行った時も主催者のひとりの女性とこういう話しをしていたら、「そうなのよ! ヒッピー文化の中でも男おとこしてて、そういうことを捉え返してない人がいっぱいいる。そういうところから変えないと世の中変わらないと思う」という嘆きのこもった意見をお聞きしました。

—— でもドンジャラは女性が中心で、男性はまわりでサポートするという体制なのがいいですね。

守田● そうですよ、だから居心地いいのではないですかね。女性の尊厳が輝いてるお祭りだなと思いましたね。でもヒッピームーブメントとかも含めて旧来のありかたがまだまだ強くあって、まあまだまだ僕も含めて日本の男性の平均的な感覚が劣っているわけで、我々の課題として、向き合っていく必要があると思うのです。

—— 「社会的共通資本」に関する研究をするそうですが、それはどういうものですか?

守田● 僕の先生に宇沢弘文さんという世界的に著名な経済学者がおられました。僕はその最晩年の弟子なのです。もう亡くなられてしまったのですが。いわゆる近代経済学の中の日本の第一人者でありながら、その近代経済学の批判を行われた方なのです。アメリ

カのシカゴ大学で教鞭をとっていて、先生の先生やまわりにいた同僚などにノーベル賞とってる人が多くて、教え子にもスティグリッツなどがいたりします。その彼の一番の論敵だったのがフリードマンとって新自由主義の祖です。宇沢先生は新自由主義の考え方とは真っ向から切り結んで闘われたのです。

先生の中にはずっと社会主義とかマルクス主義に対するシンパシーがあって、文章として明確には残してないのですが、社会主義をもっとソフィストケート(洗練)するというか、市場経済は一定程度残しておきながら、一番重要なものは共有・共同性にするべきだと言われ、それを社会的共通資本と名付けられました。それは何なのかというと、人間にとってそれがなければ絶対に社会が成り立たないもの、平たく言えば環境とかインフラも入るのですが、宇沢先生のオリジナリティーは社会的制度をそれに入れたことなのです。明確にあげたことは教育、医療、それから金融なのです。

—— へえー、教育や医療はわかりますが、金融も?

守田● 金融制度というのは、今もそうですが、そこが博打うちみたいなのを始めたから、汗水垂らして働いたお金が一夜にして藻屑になってしまい、社会の乱れを引き起こしてしまいます。これはナチズムなどが台頭した背景でしたよね。そういうのが一番社会的不安と対立を作り出すから、経済的な安定性を守るまっとうな金融制度が人間にとって非常に大事な制度なのです。あるいは医療とか教育を市場にまかせて、金儲けの場にさせるのも論外です。

だからといって、官僚的な独占的な支配にまかせるのもいけない。もっと開かれた、たとえば市民委員会とか専門家も交えた開かれた管理制度を作る必要がある。……ちなみにともともと教育委員会というのはそういうものをめざしたものなのですからね。教育委員会は国の権限のもとにあるのではなくて、各都道府県の自治制のもとに設置されたのです。それがその地域の教育を決めることになっていて、あれはだからファシズムを生んだ国家教育に対する対抗手段だったのです。今は骨抜きになって文科省の手先になってしまっていますが。

だから分権的で、その地域の専門家や市民によって運営されていくのが社会的共通資本の考え方なのです。僕も今は原発と被曝の問題に集中していますが、だんだんに社会的共通資本のことを広める活動を増やしていきたいと思っています。

—— 今は原発の問題を一番のテーマにされてるようですが、311の時はどう思いまし

たか?

守田● 311の時には、「ついにこの日がやってきた」と思いました。それまで長く社会運動をやってきけていても、どこかでまだ自分はトレーニングの段階だという気持ちもあったのですが、311の時に、「自分が培ってきた知識とか経験とかをすべて出す時が来た」と思いました。それまでいろいろ食べるための仕事をやってきたけど、それをすべてなげうち全面的にこちら側にシフトして活動しはじめたのです。

—— それ以前も原発の問題には関わっていたわけですね?

守田● もちろん。集会に行ったり、特に小出さんの本などはよく読んでいました。僕なりにチェルノブイリの事故の実態を勉強する中で、あの時も事故が当初隠されたことを知っていました。人びとを逃がしてくれなかったわけです。日本でもきっと同じことが起こるだろうと強く思っていました。それで原発事故が起こったときには、自分に近い原発だったら自分が逃げるし、遠い原発だったら「逃げる!」と情報発信することを心の中でシミュレーションしていたのです。だから大きな地震があると原発をチェックするのが自分にとって日常的なことになっていて、福島原発事故の時には、「ついにその時が来た」と思って、「すぐに逃げた方がいい」という情報を発信したのです。

最初は自分の知っている人に対してメールで知らせたのですが、それを祖牛さんが山水人のメーリングリストに転載してくれて、それだったら自分で投稿しても変わらないと思って投稿しはじめたら、それをきこりさんがあちこちに拡散してくれたのです。そして蝦名宇摩さんなど鋭敏な感覚を持った人たちがそれを読みながら逃げてくれたのですよ。けっこうお祭り系の人たちに拡散していったのではないかな。それがあんなに関わらずお祭り系の人たちが一番早く逃げましたからね。

だからそういう意味ではあれは僕の中でシミュレートしてきた行動だったのです。●



★守田さんは3.11から「地震情報」というメールニュースを連日46回発行。それに続いて「明日に向けて」というブログを2011.3.26にスタートさせて今に至っている。
http://blog.goo.ne.jp/tomorrow_2011